

## 狂気の時季○きょうきのとき

私は誰からも嫌われたくないんです。

それでもやっぱり嫌われてしまう。私の心の狭さから、きちんと他の方に分かるように表現できないもどかしさから、また、イライラとしてしまい、そして嫌われてしまう。

原理主義的、あるいは一神教的なゴリゴリな意見の無理押しをしている自分には、かなり前から気付いてはいました。立場が変われば、とても鼻持ちならない、許すことのできない狭い選択肢を提示して「これが正しいんだよ」と言われても、ましてや「頑張る」ことや「成長する」ことがまるで悪いことのように言われては大卒では理解できても、まるで自分自身を否定されているようで、素直には「そうですね」とは言えませんよね。

それでも言い続けることしか、私にはできません。今言わないことには、想いの明日が五十年も八十年も先になって、わずかな犠牲ですむことが、何千万人も犠牲を出してしまう。それどころか、この惑星のかなりの数の生物種までも道連れに、などということが許されるはずがないのです。寂しさの中でも言い続けることが、おそらく最後の私の仕事なのだと思います。

ここまで書いてきましたが、きつとあなたは、ただ字面を追うだけで、自分自身のこととして考えてくれていますよね。「今までが何とかなってるんだから」や、「ひとりが何をしたらって変わらないよ」と、目の前の生活にアクセクしつつ、「変わる」ことに対する面倒臭さが表に出ています。それでも変えなきゃならないんです。

今朝の報道番組で、政権政党を含む八つの政党の党首が政治の方向性について議論を交わしていましたが、どれもあまりに場当たり的なことしか言っています。しかも経済に関してはどこも一様にプラス成長を打ち出しています。次の選挙の当選を考えるのが政治家なのか、それとも将来の国のありようを考えるのが政治家の仕事なのか。まずは政治家のなすべき仕事とは何か、からの議論となっ  
てしまいます。

日々失業率の高くなる現状では、「まず、経済対策」は分からないではありませんが、五十年後、百年後を見据えて今の経済対策を考えないと、今までの失敗

を繰り返すことになります。今の市場主義経済は消費人口と労働人口が増え続けることを前提で作られたシステムだと思えません。だから数年前にはじめて日本の人口が減ったとき、「年金が破綻する」とばかりに、あれだけあたふたとした慌てようを呈してしまいました。

でも、人口増加による経済成長の維持は、いつかは破綻します。このまま百億人、二百億人と地球の人口が増えた場合、その食料は、エネルギーは、水はどのように賄うのか。賄えるのか。一部の強国、その国の中でも一部の資産家だけがより裕福な生活ができる。それでもいつかは鉱物資源、化石燃料はなくなります。なぜなら、これらの資源は再生されません。有限なのです。そして人間の経済活動は再生可能な循環資源にさえも量的に負荷を与えています。水、大気、動植物という支配不可能な資源。人類の大きな誤算は、これら隣人たる自然をも征服管理できると勘違いしてしまったことでしょう。我々自身が、その一部であることを忘れてしまっています。

テレビ番組を見て、政治家の話聞いて、イライラ、イライラと、なぜ見ようとしなののか、どうしてイメージできないのか不思議で仕方ありません。子どもたちの未来を、地球が一つしかないことを、どうして考えようとしなののか。考えれば考えるほど不思議で仕方ありません。で、結論は。「自分自身が狂っているんじゃないか」と。

「否」。論理的にも間違っではありません。「地球は一つしかありません」し、「石油、石炭、鉄鉱石、ボーキサイトなど再生できない資源はいずれは枯渇します」。

●  
居間で新聞の雑誌広告を見る。

いま、このように資源の枯渇までが問題視される時代に、「ドライブを楽しむ」や「快適、車生活」などという車の購入を増長するような記事をよく書けるものだと思う。部分的には植物性のプラスチックなども使っているようではあるが、基本的には鉱物資源の固まりが化石燃料を撒き散らして走る。これほど環境に負荷を与える道具を、歩けばただか五分で行ける買い物にも乗って行く。ましてや娯楽や趣味のレベルで乗ることができる感性は、まったくもって理解不能である。おそらく環境教育の不足なのか失敗なのか。車は乗って当然、持っているで当然という感覚は、地球や生物としての人類のバランスとしては、あまりにも

歪んだ感覚なのだが、それを歪みなどとも思っていないのが、教育の失敗なんだ。などと考えているときに、

「岡崎に行ったら、車を運転するよね」というかみさん。

定年を期にかみさんの実家のある岡崎で来年から暮らすことにした。だからといって車に乗る気はない。いまの埼玉の家より、ずっと駅からも近い。第一、会社への出社がない生活である。これで車を使つたんでは、いつ歩くというんだ？ 歩くために人類は直立二足歩行をはじめたんだ。歩くのをやめたために腰痛にもなると、以前テレビでやっていた。

自動車会社も困つたものだ。企業の社会的責任というものを、どのように認識しているんだ。これだけ環境問題が言われているのに。テレビでは毎晩、日本車やら外車やらのコマーシャルが流れている。やれハイブリッドだ、やれ燃費がいなどと購買意欲をそそる映像が流れている。車産業の日本経済の牽引力は強く、マスコミも本当のことが言えない。車産業からの広告費がなくては経済的に立ち行かなくなってしまう。まさに原発立地自治体の、経済か安全かのジレンマと同様な状態に、マスコミは遭遇している。

「おじいちゃんもおばあちゃんも歳なんだから、何かあつたときは、あなたにも運転してもらわなきゃ」

タクシーがあるし、救急車という選択肢だつてある。

なにも事業としてやっているものさえも使わないと言っている訳ではない。いや、長い目ではそのあたりも使うべき車体や燃料は考えるべきなのだが。

「おまえに乗るなどは言つてはいない。が、俺は運転はしない。足がある」

通勤の乗り換えでの、都内のJRの駅。高架のホームから通勤の同輩に押されながら、横目で街並みを見る。

灰色にくすんだ古いビル、奇怪な形をした新しいビル。ビルの中の遠くには二階や三階建ての民家もちらと見える。この視角に入る建物群のどれほどの建材が再生可能な資材から作られたものだろうか。

山を掘り、地中をくりぬき、この建物群の多くの材料は集められている。そしてこれらは朽ちても大地には戻らない。いつか、これらが撤去できないまま、巨大な廃墟として残つてしまうのではないのかと不安で仕方がない。

地下鉄に乗り換える。

建物が密集した地上を避け、人を運ぶために穴を掘り線路を通し、鉄の塊を走らせる。一樣に無口な朝の乗客。一平方メートルの中に七、八人の赤の他人が押し合いへし合い、急なブレーキがかかっても、たたらを踏む隙間さえもない。生物学的にこのような状況を耐え続けることができるのだろうか？ 生身の人間、

生物としての人間にはかなり厳しい環境ではないのだろうか。地下鉄の吊り革に捕まりながら。ときたま心の中で「ウォー」と叫んでいる自分がいる。みんなどうしてこんなに我慢強いんだ。

この地中の線路が地下で二層にも三層にもなり、新しい路線では、ホームに降り立ってから地上までの時間が五分を超える駅も少なくない。そして到底毎日歩くことができる階段の数ではない。必然的にエレベーターやエスカレーター、厄介になる。結局、自分の足ではなく電気を使い運んでもらう。電気の使い過ぎだろう。頼り過ぎだろう。

事務所に着くなり、鏑木多恵子が、

「社長。『旅とも』の再校が戻って来たんですが、見てください」

「どうした？ ……。なんだ、これ初校で全部トルになっていたんじゃないか」

「ええ、そうなんです。その他の赤字も、ちよつと」

事務所は、従業員三人と私の小さな出版物制作を中心としたデザイン会社だ。

鏑木多恵子は、今年三十二歳。他の若い二人のまとめ役で、ときには、タメ口にもなるが、丁寧な仕事ができる。私が岡崎に行った後は、かなりの部分をまかせることが出来る人材でもある。

「それにしても他の赤字の量もひどいな。推敲した原稿じゃない。これじゃ次は念校にはならないな」

出版物にかかわらず、印刷物の紙面のデザインは、いまはDTPと呼ばれるパソコンでのデータ作りとなっている。文章原稿や写真を預かりパソコンの画面上でデザインし、ゲラと呼ばれる確認用のプリントを出して先方にチェックしてもらう。

この確認用の一回目のゲラが初校ゲラで、このゲラに訂正用の赤字が書き込まれ戻される。その赤字をパソコン上で直し、二度目に出すゲラが再校ゲラで、基本は初校・再校の二校で終了し、印刷所に入稿となる。それでも何かの間違いでもう一度ゲラを出すケースもあるが、三度めは三校とは言わずに念のために出すゲラだから念校と呼ぶ。

この行程は、日本では百五十年続いた印刷物制作の経験の中で作られた。先人の方々の無理のない作業をするための工夫の集積である。

『旅とも』は編集プロダクションの企画で、某出版社から発行されている海外旅行者のための簡易ガイドである。その編集プロダクションの女性編集者とのやりとりで作業は進んでいた。プロダクションに電話をしてみる。

「再校、ちよつと赤字が多すぎませんか。それに発音部分の赤字は初校でトルになってしまったものが、今回またすべて入るようになっていきますよね」

「すみません。編集長から赤字が入ったもので」

「初校では見落としていたんですかね」

「初校ゲラはたたき台で、編集部には再校から見せるようになっていたので」

「え……。初校はたたき台？ ダミーとでも？ こちらに原稿を貰う前に編集長との表記の打ち合わせなど、やってないんですか？」

「再校ではじめて原稿は見せます。初校がダミーという訳ではないんですが、ずっと、このやり方でやっているんですが」

この『旅とも』は十数年前にお世話になっていたプロダクションから、久しぶりに今回お願いして、いただいた仕事である。

「これじゃ初校ゲラは試しに出しているようなもので、本来の初校にはならないじゃないですか……。こちらにいただける最初の原稿から、推敲した編集長にも見ていただいた原稿もらえなきゃ、ピシッとしたデザインなんてできませんよ。実際、今回の赤字で原稿が増えたり減ったりで、写真まで手を入れなきゃ行数の調節ができませんよね。つまりデザインまで変えなきゃあ入らない」

「……」

電話を切り、鏑木を呼ぶ。

「駄目だ、こりゃ。とりあえず指示どおりに直して三校出して。三校が再校と思うしかないな」

「分かりました。それにしても最近変ですよ。私ですら素人と仕事しているような気がしてきます。初校より再校の方が赤字が多いなんて、どう考えたって変ですよ。倍の頁をデザインしているようなものですよ」

「すまん。月刊誌が一冊無くなると厳しいよ。この仕事もわざわざ昔のよしみで貰っている仕事だから。本当はこちらに貰う前の段階で、きちんと出版社の編集長と打合せをしてくれていたら、お互いにみんな楽なのにね。とりあえずやってみてという、場当たりの仕事が多いよね最近。綱渡りだよこれじゃ」

「私はまだ『遠くに』のような、まともな編集部もあるのでいいんですが、佐藤君大丈夫でしょうか？ 昨日出していた頁が六校目だとか言っていましたよ」

佐藤の担当する雑誌は大手生命保険会社の販売員女性向けの社内報で、原稿や赤字のやりとりは直接生命保険会社とだが、仕事そのものは生命保険会社から広告代理店に発注され、わが社はその代理店から依頼されてデザインをしている。

市販雑誌よりも単価はいいが、数ヶ月前など印刷所に入れるまでに十五校という頁もあった。五校くらいの段階で記事の総差し替えがなされたのである。出版社の編集者のようなプロの編集者ではなく保険会社の広報部で編集している。先方の社内システムの細部は不明だが、二校あるいは三校で終了という認識がまっ

たたくバラバラとFAXが送られてくる。どうやらゲラを見る方が三人いたら、それぞれの赤字が出るたびにFAXが送られて来るようである。以前一回目の赤字で五行ばかりばつさりと削りがあり、二回目のFAXで、一回目に削った部分の文言の訂正赤字が来て困ったことがあった。このときはさすがに代理店経由で、赤字を一枚のゲラにまとめて貰うようお願いしたが、担当によっては、いまだに改善されていない。

このような苦情やお願いは代理店経由でというのも、もともと、この雑誌は月刊誌なのだが、偶数月と奇数月で依頼されている代理店が違うのである。つまり文句をいう代理店はいつでも切ることが可能な仕組みをとっている。さすがに十五校を出したときは、代理店に何とかならないかと頼んだが、数日後にあった説明は、「社員教育のため」だそうである。

「生命保険会社とは人の安心を守るのが仕事でしょう。その社員が十五校など、ほとんど下請イジメとしか思えませんよ。想像すれば分かりそうなものでしょう。第一、赤字漏れなど事故があっても責任は持てませんよ」

と、代理店の担当者に言うが、言いながらも「言う相手が違うよな」と思う自分がいる。

それにしてもDTPで、マックというパソコンでデザインするようになって、でたらめな進行や安易な文字訂正の赤字が多くなってきた。コンピューターだからと簡単に直せると思っている編集者やライターや著者のなんと多いこと。無知もはなはだしい。確かに一括で直せる部分もあるが、多くはアナログと同じで、人の目で見て確認して、その場所を選択して一カ所一カ所、手作業で文字を入力する。赤字が多いと直し漏れもあるし、打ち間違えもある。実に煩雑な作業となってしまう事故だって起きる。

そもそもDTP作業で出力したゲラに、体裁上の問題以外の文字訂正の赤字が入ること自体、状況としては事故を呈している。

昔と違って、ほとんどの著者がワープロで原稿を書く。仮に著者がアナログで原稿用紙に書いていても編集者がワープロで入力すれば、印刷文字と同様なきれいな文字として読める。この時点で表記・表現の統一や内容の推敲をして、我々デザイナーに渡すのが基本である。

鏑木多恵子の担当する『遠くに』の編集部のみが、この基本をきちんと踏襲する、あるいはするように努力するまともな編集部である。

ところが年々このようになまつとうな編集部が少なくなった。鏑木多恵子のいらいだがよくわかる。少なくなったところか、初校ゲラで表記・表現の統一をするのが当然だという編集部や、なんと印刷入稿後の色校正で文字表記の統一をはじ

めるプロダクションさえもあつたのには驚いた。もはや印刷の組版、製版の違いさえも理解しようとはしていない。プロの不在とはよく言ったものである。

表記・表現を統一し推敲した原稿を整える。視覚面もデザインフォーマットを確認し共通の完成イメージを持つ。これを最初にやることで、どれだけ後の作業が楽になるか。

現状では、「時間がないのでとりあえず入れよう」や「とりあえずやってみて」が多く、その後の多くの作業が無理に無理を重ね、二倍三倍の作業量となっている。延々と「とりあえず」、「とりあえず」、「とりあえず」、「とりあえず」、「とりあえず」、「とりあえず」……。

いま私たちに必要なものは「持続可能な社会」とは何かを真剣に考え、それを行動に結びつけることだと思います。私自身が五十年以上もさまざまなところから収入を得ながら曲がりなりにも生きてきたのは、単に運が良かったとしか思えません。社会的な事務処理能力は明らかに低い私が、二人の子どもをもうけ、ともに社会人として成長させることができました。ほとんど奇跡に近い偶然を誰にもなく感謝したい気持ちでいっぱいです。

長い道だったような気がします。ただ生きています。社会環境は変わりましたが、旅行に行き、友人と酒を飲み、普通に生活しています。つまり持続的な生活を過ごしてきました。このような普通の生活が、このまま二十年も五十年も続くと考えるのは、あまりにも現実を知らない、今起こっていることへの無理解や無知からきているのですが、人は今が永遠に続くと思いたがる生き物なのかも知れません。

二〇一一年の十月、地球の人口は七十億人となったようです。では地球の人口が、その半分だったのはいつだったのかと思います。調べてみました。一九六〇年代半ばのようです。ここ五十年ばかりなんです地球の人口が倍に増えたのは。いや、増やしてしまったのです。十九世紀初頭、十億人しかいなかった人類は百数年かけて二十世紀初頭で二十億人になりました。十億人増えるのに百年かかった地球の人口を、五十年で三十五億人増やすなど正気の沙汰ではありません。

「今までが何とかなってるんだから」が通用しない時代になっています。

そしていまだに人口増によるマーケットの拡大、より安い労働人口の確保をと、どのように人口を増やそうかと考えています。そろそろブレーキをかけないと、とんでもない破綻に進んでしまいます。

このところボーとして電車を乗り過ごすことも増えてきました。睡眠時無呼吸症候群も進んでいるのかも知れませんが。ともかく眠いです。でも書きますね。もう時間がありませんものね。

●  
マンションの重いガラスの扉を押しエントランスに入る。節電のため薄暗くなったホールの右面に郵便受が並ぶ。「205 鏑木」のネームプレートのある郵便受けを確認する。このプレートの「鏑木」の文字を見るたびに、専門の同窓生の陽子の「いいよね（かぶらき）。何となく男っぽくて」という言葉を思い出す。何故？と聞くと、「プレートに名前が書けるじゃない。私なんか物騒で名前書けないよ」と言う。その時はじめて、私、自分の苗字が好きではないのではと思っただ。

郵便受けの扉を引くと丸まったガス料金の通知書と白い封書。裏を見る。春子の結婚式の案内状である。東京にいる高校の同窓生も、ここ二、三年でバタバタと結婚している。昨年などは専門の同窓生と三組もあり、個別には彼女たちの幸せを飲んであげるのがだが、やはりどこかに気後れのようなものがある自分に気づき、「嫌な奴だな」と思ってしまう。

郵便受けを背にするとホールの反対側にエレベーターとその右に階段がある。階段を昇りながら携帯に出る。陽子からである。

「多恵子、明日空いてる？ 典子と渋谷で会うんだけど、多恵子も来ない」

明日は土曜日だが、事務所に出勤して午前中は宅配便を受け取らなければならぬ。

「午後からなら大丈夫よ。典子、小百合ちゃん連れて来るの？」

「旦那さんに預けて、一人よ。三時に渋谷」

「場所、どこにする？」

「とりあえず、渋谷で三時ね」

「ちよつと。陽子。とりあえずって」

切れてしまう……。とりあえずかあ。

陽子も専門のときはこんなじゃ無かったよね。もう少しきちんと場所を決めていた。まあ携帯電話があるから会えないってことはないけどね。どこか人間がアウトになっていく。「とりあえず」か。

そういえば事務所で社長が騒いでいたな「どいつもこいつも『とりあえず、とりあえず』って。何も決めないまま作業を進めて。結局自分で自分の首を絞める。自分の首だけならいいが、こちらの作業時間も倍になるし、そんな会社に限って、



『予算ありません』だかんね。病んでるよ、いまの時代は。政治家だつて一緒だよ『とりあえず』で場当たりのことばっかで、明確に『こんな日本にしたいんで、いまこれをやる』つて政治家一人もいないよ」

ここ数年、社長のイライラは増している。

確かにパソコンも便利な道具、だけど携帯も便利で、便利な物は、そのマイナス面が見えにくいのかも知れない。陽子が待ち合わせ場所にアバウトになるように、便利にはプラス面と、マイナス面もあるんだと自覚する必要があるんじゃないのか。すべてがパソコンや携帯のせいではないけど、ボタン一つで書体を変えてくれるんじゃないかなど、便利な道具には過度な期待を持つ。心に余裕が無いと「とりあえず」と道具に期待して、決めなければならぬことを後にまわしてしまふ。それを二度三度と繰り返していくうちに、それが日常になってしまふ。

専門のときのデザインの先生が言っていたけど、「デザイン」という言葉には、私たちの仕事のように具体的に「形作る」だけじゃなくて「計画する」という意味があつて、これは人間固有のもの。作るべきものを最初にイメージしているのが人間なんだそうさ。

「とりあえず」つて言いはじめた人間は、人間であることを否定しはじめたんじゃないのかとも思う。

翌日、渋谷の駅では五分ばかりのメールのやりとりで三人は会うことができた。数件のウインド・ショッピングの後、喫茶店に落ち着く。

「小百合ちゃん元気？」と、典子に聞く。

典子は二年前に結婚して、昨年出産した。小百合ちゃんは一歳四か月で、三カ月前にも陽子と一緒に自宅に遊びに行った。旦那さんの両親と同居で、「時には気晴らしに友だちとも遊んでおいで」と理解のある旦那である。

「ええ。元気。たまに熱を出すこともあるけど、近所の男の子に比べると病院の通院頻度もかなり少ないみたい。やはり女の子の方が強いみたいね」

「小百合ちゃん、美人ちゃんだから人気者なんじゃない。そろそろ彼氏なんかできたりして」

「何言ってるのよ。まだ一歳半にもなっていないんだから。でも先日公園で同じくらしいの男の子と友だちになったみたい。どうやらその子の持っていた足こぎの自動車に興味があつたみたいで、人形より自動車や電車の方が好きみたいね」

「まだ本当に何が好きかなんて分からないんじゃない」

「でもね電車見ると指差して『シャー。シャー』つて言うのよ。猫やハトにも興味があつて『ニャンニャン』とは言うけど、あ、『デンシャ』つて言えないのよね。他にもそうだけど、語尾だけ覚えて電車は『シャー』ね。それにしても最近、

人の口癖を覚えるのよ。困ったわ。小百合が『ヨイショ』って先日言っていて、え、何でって旦那に聞いたら、どうも私の口癖だったのよね。自分でも驚いてしまった。油断できないのよ本当に」

やはり、典子の話題は娘の話が一番となる。携帯の写真を見せながらの典子の口調に母親の子どもに対する愛情が見て取れる。微笑ましさと、女性の強さも垣間見える。

「うらやましいな。典子、幸せそうで。ご両親と同居と聞いたときは正直なところ大変じゃないのかなと思ったけど、お義母さんも優しそうで」

典子と旦那さんの親との同居という選択。おそらくこれが一番正しいのだと思う。でも実際の多くの家庭では親の方にも子どもの方にも折り合いをつけるだけの余裕はない。個を大切にすることはそれで大事なこともなだろうけど、むやみに核家族を増やしてしまった。核家族を作ることにより住む家はもちろんのことテレビ、車などが大量に必要になり消費社会を形成し成長をうながしてきた。

「最初は私も不安だったし、気まずさもあつたけど、同居って助かるわ。検診で会うお母さんなんかと話をするんだけど、夫婦共働きで核家族って大変よね。私には無理だわ。みんなよくやってるよね」

「多恵子も私も、もう三十二歳よね。典子みたいにラッキーな旦那さんと結婚できればいいけど。結婚したい気持ちはあるんだけどね」

「陽子は大丈夫だよ、きつと。ガムシヤラにでも共働きで子育てできるタイプね。それに三人の中では一番、同居が苦手じゃない」

「そうね。その前に彼氏ね。明夫からは結婚の話はしてこないし、何だか結婚の相手って気がしないのよね。多恵子はどうなのよ。西村君、もう長いよね」

「もう報告しとこうかな。来年には結婚します。昨晚、達也と話して決めたの。実はね、子どもができた」

●

ともかく、私の子どもも孫も多少の不便はあるにしても、同じような生活ができる社会環境は、あって当然なのです。これはもはや個人のイメージーションに頼るしかないのかもしれない。

同時代において、出生による格差や差別があつてはならないのは分かっています。そして誰もが、「健康で文化的な最低限の生活」を営む権利を有しています。貧困問題として騒がれている昨今の派遣切りや路上生活者の援助に関しては、多くの人たちの同意が得られています。しかし、いまだに「あれは自分から選んで

そんな生活してるんだろ」や「怠け者だから、そんな仕事にしか着けなかったんだ」などといわゆる「自己責任論」を言う人もまだいます。悲しいことではあります。人は今の自分の状況でしか基準となるモノサシを持ってないようです。自分は一生懸命頑張ってきた。でも彼らは……。冷静に考えると彼らの何を知っているのか。自分がここまでつらい思いをしながら頑張ってきた。その思いだけが拡大されて本当の彼らは見えていません。このように「自己責任論」を言っているかぎり、より格差や差別が増えるばかりです。

● 「達也、今日の調子はどう。そろそろ会社の方もきちんとしなきゃね」

実家で自分でトーストを焼き、遅めの朝食を摂る。そのまま台所で新聞を読んでいると、母が話しかけてくる。

両親には本当に心配をかけてしまった。

二カ月前、会社に休職願いを出し、実家のある岡山に帰って来てしまった。

その一カ月前、多恵子が流産をする。朝、出勤の準備をしていると多恵子から電話があり「お腹が痛い。すぐに来て」と言う。私鉄の二駅をタクシーで駆けつける。救急車で病院に。「なぜなんだ。なぜ俺の子が」という思いは、むしろ母である多恵子の方が強かったのだと思う。

翌日には退院はできたが、自宅に帰るまで、弱気な素振りさえも見せなかった多恵子が、布団に横になるや泣きはじめる。ただ手を握っていてやることしかできない自分が情けない。二日ばかり多恵子の家から出社する。三日目には仕事に出ると言い準備をする。心配ではあったが、「四日も休んでしまったわ。もう大丈夫よ」と言い一緒に出かける。

その一週間後くらいからだろうか、朝の目覚めに首の後が重くなる。その日は会社に行くが、どうも電車の人ごみが前日より圧迫感を感じるようになる。後頭部に汗をかく。仕事そのものは、変わりなくこなせたように思う。だがこの日の退社の電車では、明らかに冷や汗を感じた。二十分ばかりで息が苦しくなり、訳の分からない恐怖心に襲われる。次の駅で降りベンチで一時間近く休む。結局電車に乗ることができずに改札を出てタクシーで自宅に帰る。

翌日は駅まで行くのだが電車に乗ることができない。駅の側の交番で心療内科のある病院を探してもらう。病院でつけられた病名は『対人恐怖症』である。

「ごめん。母さん。やはり会社は辞めることにするよ。伯父さんのところで働けないかな」

こちらに戻って二、三日経ったときに、心配した母の長兄がやって来た。その

ときはまだ冗談だったのだろうが「東京に戻るのが難しいようなら、俺んところで働けばいいさ。人手があれば助かるから」と言ってくれている。

「やっぱり会社は無理みたい？」

「まだ人ごみが怖いんだ。岡山まで出て通勤電車にも乗ってみたいしてはいるんだけど、自分の中に湧いてくる怖いという気持ちを、どこに持って行ったらいいか分からないんだ」

「達也が決めたんだったら反対はしないよ。伯父さんには私からもお願いしておくね。お父さんも私も、本当は達也が家にいてくれた方が嬉しいんだよ。長男なんだし。あ、プレッシャーかけている訳じゃないんだからね」

「分かってるよ。ごめん。心配かけて。でも人ごみ以外は大丈夫だから。変な心配されると、よけいに滅入るから」

●  
富む人、貧しい人。世の中が二極化し、富む人の中でもより約束された椅子に座れる人とで格差が出て、椅子に座れなかった人は疲れてしまい、貧しい人の中に落ちていきます。このまま行けば、ほんの一握りの裕福な人しか残りません。それも熾烈な競争を日々繰り返しながらです。普通の人に耐えられるはずがありません。にもかかわらず「自己責任論」を言ってしまう。それだけ今の自身の仕事にしか目を向ける余裕すらなくなっています。

だから五十年後、百年後をイメージするのはかなり困難です。至難の業ではありますが、ときには立ち止って、ときに目の前の仕事をサボってでも想像する癖をつけないと、これは大変なことになってしまいます。

我々と、時を越えた五十年後、百年後の子孫たちとの格差を。自分の子どもの五十年後、その子どもの百年後、今の私たちと同じような生活ができているのでしょうか。人口が増えることでしか、成長することでしか安定しない、今の経済のままでは、今の我々の生活感覚のままでは……。

無呼吸症の治療に毎晩CPAPという空気を送る機械を使っています。確かにはじめてこれを使った日は。睡眠ってこんなに気持ちいいんだと実感しました。昼間の眠気は取れませんか。よくよく考えると、人間はずるいですよ。このような器械を装着してでも生きようとする。サイボーグですね。ま、確かに人間としての気持ちは持っているつもりでも、少なくとも他の動物のように自分の肉体のあるがままに生死をゆだねることはしませんね。

いま人類は壮大な実験をしています。

全地球の生物を巻き込んだ、生きるか死ぬかの大実験をです。

ここまで過激な、私たちホモサピエンスの滅亡のみならず、この地球の全生態系を変えてしまうような実験を、一部の牽引する国やその指導者だけで決めてよいものでしょうか。悲しいかな、その指導者さえも、この壮大な実験の先にある人類を含むかなりの生物の滅亡という、あまりにも不幸な結果が起きる確率を、どこまで理解しているものか。

多くの、まだ生物としての感覚が磨耗していない友人が、「だめだよ！ このまま進んじやだめなんだよ」と警鐘を鳴らし続けているにもかかわらず、それを聞こうとしなかった指導者たち。そして私たち。一部には、まったく理解しない無自覚なままの人もいますが、多くはこの「進歩」や「発展」や「成長」を続けることが、人類の滅亡を懸けた壮大な、そして無謀な実験であることを理解しているはずなのですが。



最近、明を乳母車に乗せて、主人が働く畑へと昼ご飯を運ぶのが晴れた日の日課となっている。気分屋の気質がかなり強くなつた明も一歳半、毎日がピクニックでパパとお弁当を食べるのを楽しみにしている。最近、農道もアスファルト張りで、乳母車での移動も楽である。遠くに中国山脈の見えるのかな田舎での生活もすでに三年となっている。

「おお明、来たか。ごくろうさん」

「パパッ。ろうさん」

まだまだ、明は正確な発音は無理のようであるが、それがまた可愛さを増す。

日と月の二人分の名前を持った明。四年前、流産で亡くした子の分も大きく育ててほしい。

「お疲れさま。ご飯にしましょう」

「ああ、ありがとう。どう、農家っていう生活は。もう慣れたかな」

「もう三年よ結婚して。収入は少なくとも、この暮らしが合っているみたいよ。人間として生きているのが実感できるわ。もう都会生活には戻りたくはないわ」

「そうだよな、俺もすっかりよくなった。四年前は本当に死のうとも思ったときだってあったんだが」

畑の畦に座った主人の膝の上で、おにぎりをほおばる明が眩しい。

「あのころが嘘みたいね。私も思い切って会社を辞めて来てよかったわ」

ここで暮らしていると、田舎から出て生活した東京での十五年間は一体何だった

たんだらうと思う。便利な道具や着飾るアクセサリ、友達との楽しい時間も美味しい食事もお金を払うことによって受けることができる。

そして、その生活を維持するために、お金を手に入れるためにアクセクと働く。理不尽な中で労働で、ヘトヘトとなり、立ち止まる余裕もなく働く。そのストレスの解消と言いながら物を買って替え、食事し、そしてまた労働する。いまま陽子や同窓の友人や東京に住む多くの人たちは、ストレスと消費の中で暮らしているのだらう。「頑張れー！」と小さくエールを送らう。

「アー、ア。ター」

食事を終えた明は、バツタを見つけて追いかける。

「明も大きくなったよね」

「ああ、言葉も随分と増えて来たんじゃないかな。そうそう、お父さんがジージを言わないとしよげていたよ。バーバははつきりと言うのに」

「まだ、待ちましようよ。時間の問題でしょ」

「はは、そうだな。それにしても大きくなった」

自然の日射しの中で、明を見る主人の目の穏やかさ。これが幸せということなんだと思う。

達也のことを主人と呼び、いまはパパとも呼ぶ。大きくなる明を愛し、その幸せを思う。そして、このお腹の中には二人目、いや三人目の子どもが宿る。この子たちを見守って行こう。三十年でも四十年でも。

「西村多恵子かあ。いい名前だよ、私の名前」

「え、なに？」

「ううん、何でもない」



生態系の循環の中に私たちはいます。かなり肥大化した種として。

まず空気は植物の光合成によって安定した状態を保ち、私たちは酸素を吸って、その酸素を赤血球に乗せて身体各細胞に運んで行きます。睡眠時無呼吸症候群という病気があります。これは肺に空気が送られないため、血液は流れていても赤血球に酸素が乗っていないために、脳は酸素不足で「もつと酸素を」と心臓に命令を送ります。心臓は一生懸命にバクバクと無理な血液送付を行い疲労し、血管さえも疲れてしまう病気です。もとは酸素不足です。このように人にとっては酸素は大切です、この酸素を含む大気の安定は、人類の生存のための必須アイテムです。

そういえば私たちの遠い祖先が、海から地上に上がることができたのも、シア

ノバクテリアという藍藻類が、何十億年もかけて大気を動物が地上に上がってもよいようにと、光合成を繰り返して変えてくれたからなのです。その結果、炭素を吸って石油という人類にとって有用な（それが人類の共存不能な根源となっているのかも知れませんが）エネルギーを作ってくれたのも彼らだと言われています。何十億年もかけて。それを高々ここ数百年で使い切ってしまうというように湯水のごとく消費しています。いまだこれら化石燃料の替りとなる明確なエネルギーが見つかっていないのです。

この睡眠時無呼吸症候群という病気も、実は人類がただの生物じゃなくなったことの証なんですよね。道具を使うことで顎が小さくなる。だが人類は言葉を持っている。言葉をしゃべるためには、ある程度の大きさの舌が必要で、その舌を横になった時に支えるだけの顎の大きさがありませんね。

三十八億年という永い時間を経過して、私たちは生態系の頂点に立っています。個々がこの状況を認識するところから、もう一度、「持続可能な社会」を本気で考える必要が……。

だいたい、このあたりなんですよね。聴いてもらえなくなるのは。つまらないんでしょうね。でもね「表参道のアノ店のソノ菓子……」や「J1のソノチームのアノ選手は……」なんて興味を持ってないんですよね。だって大して重要じゃないじゃないですか。三ツ星がどうか、ワールドカップでどこが勝とうが、本質には関係ないでしょう。むしろ、中途半端な経済活動が、環境をおかしくしている。あなたの孫や曾孫がちゃんと生活ができるかが、大切なのに。嫌われたくはないんですが、ちよつと違うでしょうが。もつと全体を見なさいよ。ホントニ。あ、だめだ。ごめんなさい。

もう一度話を戻しますが、「持続可能な社会」を共通な認識として、何かを決定するときのベースにすることはできないであろうかということ。 「持続可能な成長」や「持続可能な開発」「持続可能な発展」などは企業の表向きの方便にすぎません。仮に本当に頑張っている企業があったとしても、一企業ではどうにもならないほどのトータルな負荷が社会全体にかかっています。いまのようにモノを作って売るといふ企業活動そのものが将来の子供たちの生活基盤を脅かすそれが全体として見えづらいし、見ようともしない。

我が国には日本国憲法があります。日常生活では意識しませんが、何かあつ

た場合の最上位の規範です。これと同じレベルで個人が何かを決める場合、企業が新たな事業を展開する場合の最上位の共通認識を「持続可能な社会」にできないものでしょうか。私たちの子どもや孫が、不安を持たなくてもユツタリと地球に暮らせる。そんなサステナブルを共通認識として持てる社会はできませんか。

こんな暗黒の宇宙の真ん中で、いくつかの意識だけの私が、ただ思考する。生命の歴史を思考する。やがてこの精神体が、より細分化した情念となって、この宇宙の隅々までを意識の中に置くことができるのか。それとも、新たな物質をカラダとして何十億年かをかけて、生成していくのだろうか。

(2012.10.31 『狂気の時季』 木部晃一)